浪川一輝編

一月九日（月）

Slackの雑談チャンネルを開いて、今日の予定を確認する。西宮へ向かうにはまだ早い。明朝の福男選びに向け、今夜から現地に前乗り。その後は歓迎会を兼ねた飲み会も開かれる。

「くじ引きした後はどうするの？」

出かけるための身支度を万全に整えた沙綾が、スマホを触りながら言った。

「取引先のお宅に泊めてもらえる、だって」

「ふーん。じゃあ、手ぶらじゃダメだね」

「あ、そうか」

持っていけるものが、何かあっただろうか。そういえば、晃が持ってきたエビスの五〇〇mlがまだ冷蔵庫に残っている。クローゼットに突っ込んでおいたクーラーボックスを開け、スカスカな冷蔵庫から缶ビールを取り出しては詰めていく。運べる程度の量にとどめて、クーラーボックスの口を閉じた。

壁の時計を見上げると、時刻は一六時一〇分。ソファでくつろいでいた沙綾はスマホをカバンに仕舞うと、スッと立ち上がった。すぐ近くのコンビニにでも行くような、財布とスマホしか持っていなさそうな荷物だ。

「あ、もう行く？」

流れるように玄関へ向かう沙綾に声をかけると、彼女は顔をこちらに向け、開いた手をひらひら振った。

「そっちも忙しいだろうから、見送りとかいいよ。一人で帰れる」

せめて駅前のバス停まで、と言いかけたところで、彼女はこちらを見やることなく靴を履いた。「じゃあ、また連絡するね」と言い残し、ドアを開けて出て行った。

――東京でもニュースに映るよう、頑張って。無理は禁物。

――ありがとう。そっちも気をつけて。

すぐに既読が着いた。窓から下を見ると、駅の方へ向かうそれらしい背中が見

えた。周囲を行き交うまばらな人影は背中を縮めて歩いているのに、沙綾はキビキビと人の間を抜けていく。

空調の効いた室内ではピンとこないが、今夜は寒くなるかもしれない。貼るカイロの在庫も確かめておこう。なければ、駅前のコンビニか薬局を覗けばいい。

沙綾の予定に合わせて一緒にバス、JRで新大阪まで見送っても良かったけど、僕の方が夜通しになるなら早すぎる、と彼女の方から断られた。シャワーを浴びて、身支度を整えてから行け、と沙綾に言われた通りの段取りをこなす。

完全に身の丈オーバーの、一人では広すぎる4LDK。一人暮らしの部屋から持ってきた調度品を全て置いても、全く格好がつかない。家具も家具で安物なのが良く分かる。

内装の件を晃に相談してみたが、沙綾と暮らし始めるまでに納得がいくレイアウトになるかは分からない。部屋を譲ってくれた彼女の母のこともあるし、一応「気鋭のデザイナー」でもあるし。「ここに住んでいること」をもっと活かす、演出することも考えないと。

その辺りも含めて、今夜、社長に相談してみよう。

立派な部屋には全く馴染まないスポーツウェアを引っ張り出し、替えの下着も持って脱衣所に足を踏み入れる。全く肌寒さを感じない脱衣所で、姿見を見ながら服に手をかける。鏡に映った中肉中背の自分の裸体に、怪我だけはしてくれるなよと念じてみた。

初出　令和三年二月一四日　NOVEL DAYSにて公開

一月一九日（木）

彩都西から徒歩二分のマンションに住み、千里中央のデザイン事務所に勤務しているのに、平日の昼から茨木駅前の本通商店街で、ガストに入店するとは思わなかった。ランチタイムには少し遅い時間帯らしく、チラホラ空席も見られる。

目の前にソファ席に、何度目かのドリンクを取ってきた男子学生が腰を下ろした。メロンソーダを一口飲むと、テーブルに置いたMacを弄り始める。僕もここで一仕事しようか考えたけど、デザインを考えるには周りの目が気になりすぎた。

目の前の男子学生、哲朗くんはMacの隣に広げたノートへ、何かを書き写している。

「手書き派なんだね」

哲朗は軸の太いペンを止め、こちらをチラリと見て「ええ、まぁ」と曖昧な笑みを浮かべた。すぐにクリーム色の厚手の紙に目を落とし、メモの続きを太めの線で書いていく。罫線のないノートに、余白をたっぷり取っている。

「レポートの清書とか提出物は完全にコッチなんですけど、考えるときは手の方が良いというか、ペン先で考えてるというか……」

「書けるか否かより、書き心地が大事？」

哲朗くんはちょっぴり驚いたように僕をみる。書けたらなんでも良いコスパ至上主義の奴より、信用できる。まぁ、そもそもの育ちが違うか。でも、

「立派な親父に反発する俺たちがいると、下がしっかりするのも共通項か」

「え？」

「ウチは政治家なんて立派な家系じゃないけど、弟が家業継ぐって頑張っててさ」

哲朗くんは、「へ〜」と軽い返事をしながら、ペンにフタをしてノートに挟んだ。両手を膝の上に置いて畏る。

「家族は元気にしてましたか？」

「お父さんとはお会いしなかったけど、お母さんも妹さんも元気そうだったよ」

「そうですか……」

嬉しそうな表情を浮かべながらも、彼の声は少し沈んだ声だった。

「LINEしても、全然既読にならないって、妹さん怒ってた」

「こっちで好き勝手にやってるんで、メールもLINEも開きにくくって」
「そっちの方が気楽なら、それで良いんじゃない？ その気持ちは、俺もよく分かる」
哲朗くんは、さっきの驚きよりやや強めの驚きを顔に浮かべた。
「帰りたくなければ、帰らなくていい。俺も似たようなもんだし」
実家を出てそろそろ丸三年。親父の顔を見なくなったのは、そこからさらに四年前。
「でも、会えるんなら後悔する前に会いに行った方がいいし、兄妹とはやり取りしておいた方がいいとは思うよ。もちろん、君が辛くなければだけど」
哲朗くんの顔つきが、ちょっとずつ変わっていくような気がする。社長も武藤さんも、コレを狙ってランチを段取りしたのか。二人とも、人が悪い。
哲朗くんのスマホに、リマインダーの通知が出た。もうそろそろレポート提出の期限らしい。哲朗くんが荷物を片付けている間に、二人分の伝票を摘む。視界の隅で身支度が整うのを気にかけながら、さっさと支払いを済ませてしまう。念のために、領収書をもらっておく。
お店を出たところで財布を出そうとする哲朗くんに、いらないと手で合図する。
「なんか、色々とすみません。ありがとうございます」
「いいよ、いいよ。それより、早く行きな」
哲朗くんは元気に「失礼します」と頭を下げ、自転車を止めた場所へ小走りに駆けていく。今回のランチ代、ちゃんと経費で落ちるのか。それを考える僕の横を、自転車に跨った哲朗くんが軽い挨拶を寄越しながら通り過ぎた。

初出　令和三年二月一七日　NOVEL DAYSにて公開

二月五日（日）

沙綾から一日早い誕生日祝いを受け、そのまま彼女を東京へ送り出して帰路に着くタイミングで、瑞希からのメッセージ。バイトが終わる一九時頃に太田のイオンタウンへ来い、と。

茨木で降りず、JR総持寺駅で下車して、府道一二六号に沿って歩いていく。国道一七一号線の交差点に突き当たっても、横断歩道を渡り、そのままイオンタウンへ真っ直ぐ向かった。

瑞希はいつものスタバじゃなくて、中のサイゼリヤまで来い、先に中で待っていると送ってきた。言われた通りに、イオンの中の店舗へ足を踏み入れる。新規客の案内に出てきた店員を制し、先に通されているはずの瑞希を探す。

「一兄、こっちこっち」

先に僕を見つけた瑞希がソファから身を乗り出して、こちらに手を振った。その隣に誰かいる？　瑞希の隣に座った男がこちらに振り返る。

「えっ？」

「あ、どうも。こんばんは」

武藤さんのところの学生くん、哲朗くんがそこにいた。なぜキミが、瑞希の隣に？

「ド派手な彼女さんは？」

「さっき、新大阪まで送ってきた。もうそろそろ、京都に着くんじゃないか？」

二人の向かいに座る。二人の前にはすでにドリンクバーだの、辛味チキンだの、軽い食事が並んでいる。近くまで来た店員さんにメニューをもらい、その場でグラスワインの赤を注文した。

哲朗くんに視線を置いたまま、目の前に置かれた水を口に含んだ。隣の瑞希が口を開いて、「哲朗さんにも、お祝いしてもらおうと思って」と言った。

「お祝い？」

瑞希は横に置いた大きな包みを持ち、哲朗くんと共に差し出した。

「お誕生日、おめでとう」

「ございます」と哲朗くんは付け加えた。とりあえずプレゼントを受け取り、

入れてきたらしい紙袋も渡してもらった。
「この間、エキスポシティで一緒に映画見て、一兄の誕生日プレゼント探しにも付き合ってもらって」
「僕もお世話になってるんで、この間のお礼も兼ねて、半分出させてもらいました」
哲朗くんの言い分は、半分くらい理解できる。その前提の瑞希の説明が飲み込めない。詳しい説明を訊きたかったのに、彼女は「ちょっとトイレ」と席を外した。哲朗くんは、気まずそうに身体を小さくして目線を逸らしている。
「なんか、成り行きでこういう感じに」
消え入りそうな声で「すみません……」と付け加えた。できるだけ落ち着いて聞こえるように、ゆっくりと訊く。
「いつから？」
「今月の一日から。やましいのは、一切ないです」
「ないんですけど」とまた下を向きながら呟いた。真相を追及しても仕方ない。自分を守るためにも、「良いお友達」でカッコに括ろう。
ちょっぴり気まずい沈黙の中、あっけらかんとした瑞希が楽しそうに戻ってくる。入れ替わる形で、哲朗くんがグラスを持ってドリンクバーの方へ向かう。瑞希は鼻歌を歌いながら、目の前のアイスコーヒーに口をつけた。僕はやっと出てきたワインを一口飲んだ。
「おお、哲朗くん」
入り口の方から、最近耳に馴染んできた人の声がする。哲朗と共にこちらにやってくるのは、ご家族を伴った武藤さん。
「あれ、浪川くん。もう哲朗くんと仲良くなったの？」
「ええ、まあ……」
瑞希は武藤さんの後ろにいた男性に、挨拶したらしい。武藤さんは瑞希と哲朗くんに注視しているが、店員に促されて自分たちの座席へ向かう。
「また今度、話聞かせて」
哲朗くんはさっきより一層気まずそうな雰囲気で、ゆっくりと瑞希の隣に腰を下ろした。僕もどことなくその空気に飲まれる形で、ちょっぴり沈んだ気持ちになる。僕らの落ち込みなんて微塵も感じていないらしい瑞希は、「次、何食べる？」とメニューを広げた。

初出　令和三年二月一九日　NOVEL DAYSにて公開

三月二一日（火）

スタバでテイクアウトしたコーヒーを、夕暮れ時の公園でベンチに座って飲んでいる。つい先日も、似たようなシチュエーションに遭遇したのを思い出した。

一人で思い出し笑いをしていると、ベンチから腰を上げて伸びをしていた瑞希が振り返り、「うわ、気持ち悪い」と心底気持ち悪そうに言う。女性として飛び抜けて背が高い方ではないが、上からスッと吊るされたような立ち姿、重力を感じさせない姿勢に、地味目のワンピースがよく似合う。

「何かついてる？」

「いや、つくづく地味な服装が似合うなと思って」

「どうせ私は、沙綾さんみたいなのは似合いませんよ～」

瑞希はわざとらしく「怒ってます」と全身でアピールしながら、僕の隣に座った。口でストローを迎えに行き、アイスコーヒーを飲む。

「今日は、ほっといて良かったの？」

「向こうも独りでやることぐらいあるさ。東京脱出が差し迫ってるし、忙しいんだろ」

「それで墓参りに？」

「ま、そんなところ」

大学を出て上京して以来、三年ぶりの墓参り。いや、当時は新型コロナもあったし、実家に帰らないこともあったから、さらに半年ぐらいは空いているのか。久しぶりに見た婆さんはすっかり背中が曲がり、年齢以上に老けているように思えた。

「せっかく来たのに、お父さんとは目も合わさなかったね」

「そうだっけ。目ぐらい、」

日中の出来事を思い出そうと記憶を辿るものの、霊園への送り迎えで一瞬目を見たかどうか、だっけ。いや、アレは睨まれていたような気もする。墓を掃除している間もろくにやり取りしないまま、墓前に手を合わせて、何事もなく戻ってきたっけ。

「まぁ、また今度、機会があれば」

「あるといいけどね」
瑞希は明後日の方向を向いたまま、ぼそりと呟いた。
「瑞希も晃も、自分のことで忙しいからなぁ」
僕もボソッと呟いたつもりだったのに、瑞希が少々苛立ちを込めた表情で振り返った。
「それが、イイとかワルイとかじゃなくて、オレのことで余計な負担をかけられないな、と思ってさ」
「かかってないと思ってるなら、タダのバカ兄貴ね」
瑞希は溜め息をつくと、残りのアイスコーヒーを一気に飲んだ。溜め息と一緒に、覇気というか、元気みたいなものも、身体の外に出て行ったらしい。ベンチから腰を上げた姿は、今の祖母に少し似ている気がした。
「帰るなら、送るよ」
空になったカップをもらい、一人で先に行こうとする背中に声をかけた。瑞希は一瞬足を止めて振り返ったが、「独りで帰る」と取り付く島がない。明るくて広い防災公園を、一所懸命スポーツに励む人の間を縫って、カジュアルな喪服っぽい女がスタスタと歩いていく。
その後ろ姿を小走りに追いかけるものの、どんどん距離が開いていく。公園の横を走る道路へ差し掛かるところで、大きな犬を連れた少年が、僕と瑞希の間に入った。僕の背後から、聞き覚えのある声に呼び止められた。
「やっぱり、浪川さんだ。向こうはもしかして、瑞希さん？」
後ろを振り返ると、武藤さんのお父さん、幸次さんだった。彼は大きく手を振って、先を歩いている瑞希にも声をかける。僕の前を歩いていた犬と少年もこちらを振り返り、少年は不思議そうな表情を僕に向けていた。

初出　令和三年四月二二日　NOVEL DAYSにて公開

三月二九日（水）

薄暗がりの住宅街を、スマホのマップアプリが示すままに歩いて、そろそろ五分。アプリによると左手に広がる公園が、いつも目にする彩都西公園らしい。目の前にはモノレールの高架も見えるが、今のところ出入りする気配がない。

足を止め、横を歩いていたつもりの沙綾を探すと、少し後ろをトボトボ歩いていた。その場で眺めていると、三秒とかからず、目の前まできた。自分の足元を見ている彼女に向かって、「どうする？」と投げかけた。

「公園を抜けたら、着くらしいけど」

「帰る前に、お手洗いに行きたいな。ちょっと冷えちゃった」

五分もあれば自宅に帰り着けそうな気もするが、近くにトイレはあったかな？

暗がりの公園でトイレを探すのもイマイチか。どうしたものかとマップアプリに視線を落とすと、道なりに真っ直ぐ行った先、高架の向こうにミニストップがあるらしい。

そういえば、この辺りだったっけ。少々遠回りになるけど、自宅に向かうよりは近い。公園のトイレよりは何倍もマシだろう。

「もうちょっとだけ我慢してくれよ」

沙綾の横に立ち、彼女の身体を支えながら、歩行を補助する。真っ直ぐ道なりに進むと、さっきは見えなかった看板が、煌々と輝いている。強かに飲んだ後の夜道には、とてもありがたい希望の光。高架を潜ってすぐ、駐車場の広いミニストップに辿り着いた。

沙綾は早々にお手洗いを目指した。運良く空いていたらしく、スムーズに中へ入って行った。僕はそれを見届けて、ドリンクコーナーと栄養剤のコーナーへ向かう。五〇〇mlの水と、ウコンのドリンクをカゴに入れ、ついでにお菓子のコーナーで袋入りの森永ラムネを二袋ほど追加した。

レジで会計を済ませていると、いつの間にか沙綾は僕の隣で腕を組もうとしていた。さっきまでトボトボと歩いていた割には、ケロっとした顔をしている。

「炭酸水とか、追加のビールとか入れなくていいの？」

「もう十分飲んだだろ？　お土産のウイスキーはまた今度」

駄々をこねる沙綾は気にせず、ビニール袋に入れてもらった商品を受け取った。一瞬、荷物を沙綾に持たせて自分もトイレを借りようかと思ったが、そちらに目を向けたタイミングで、別の誰かが入るところを見てしまった。そこまで切迫していないし、このまま彼女をほっぽりだすとどうなるか分からない。

トイレは断念して、サッとお店の外に出る。外に出たところでウコンのドリンクを取り出して、軽く振る。蓋を開けて沙綾に差し出すが、彼女は顔をしかめた。

「いいから飲みな。明日も朝から忙しいんだろ？」

「らぁ〜い丈夫らって。まだまだ飲めるし、日付も変わってないし……」

沙綾はそういいながらも、バランスを崩してちょっぴりよろける。転けないように手を出すと、手の中でドリンクが少しこぼれてしまった。それを見た沙綾は楽しそうに笑う。

この酔っ払いを大人しく連れ帰るには、まずはこっちがシャッキリしないと話にならない。すでに蓋を開けた方に口をつけ、一気に飲み干した。

初出　令和三年四月二七日　NOVEL DAYSにて公開

四月八日（土）

大きな鏡の前で動きを確かめながら身体を動かす人影が、三つから四つに増えた。さっきまで構えていたアクションカメラを哲朗くんに預け、瑞希も沙綾たちに混ざって身体を動かしている。

瑞希からカメラを預かった勢いで、彼女の取材、素材撮りまで引き継ごうと一所懸命画角を探して動き回っていた哲朗くんだったが、どう動いても思った画にならないのか、あるいはどれだけ気を使ってみたところで邪険な視線が向けられるからか、心底打ちのめされた表情で、僕の隣へ戻ってきた。

撮れ高を確認している彼に、「お疲れさん」と水が入ったペットボトルを差し出した。

「君はほんっとに、偉いな。折角の週末まで、瑞希に付き合わなくても良いのに」

「そういう一輝さんこそ、沙綾さんのために時間割き過ぎじゃないですか？」

哲朗くんは「ありがとうございます」とペットボトルを受け取り、僕の隣に座る。

「まぁね。でも、良い光景だろ？」

カメラに記録された撮影データをじっと確かめている哲朗くんの肩を叩き、目の前に広がっている生の動きを示した。彼は真面目そうに僕の顔を見返したが、ゆっくりと瑞希たちの方に目をやると、そちらをしばらくじっと見て、「そうですね」と低い声で言った。

彼はカメラの電源を落とし、瑞希のカバンへ戻した。僕と同じように、目の前の鏡に正対するよう、座り方を変えた。目の前で躍動する女性たちの動きに合わせ、スタジオの床もわずかに振動するのが心地いい。

華やかさにパッと目が行ってしまうのは、中央の沙綾だが、その後ろで沙綾の動きを追いかける小野寺さん、お友達の野村さんも、キレやスピードにやや欠ける印象はあるものの、要所要所のキメるところはキマッていて、様になっている。

一番後ろでポニーテールを振り回している瑞希は、リズムが微妙に合わないのと、動きに固さと重さを感じさせている。ちょっぴりボテっとしてるところがこなれれば、まとまりも出てきそうなんだけど……。

音楽が止まるとともに、女性陣の練習も一時休憩に。小野寺さんたちは二人で水分補給なり、タオルで汗を拭くなりしている。沙綾と瑞希は僕らの方へ来て、哲朗くんは瑞希に「お疲れ様」と声をかけ、タオルとペットボトルを差し出した。

僕も沙綾に「お疲れさん」とペットボトルを差し出す。彼女は水をグッと飲み、肩にかけたタオルで、口元も拭った。

「二人とも随分楽しそうに、ジロジロ見てたね」

「みんな頑張ってるなぁ、輝いてる女性は美しいなぁって。なぁ、哲朗くん？」

哲朗くんに話題を振ると、彼は瑞希の視線を受け止めながら、「え、えぇ、まぁ」と上擦った声で言う。沙綾も瑞希も、少々軽蔑が混じった疑いの眼差しを保っている。

「ほんとに〜？」

「本当だって。邪な気持ちとか、一切ないって」

必死に否定するのも逆効果な気はするが、他の戦略が見当たらない。沙綾をなだめながら必死に思考を巡らせていると、彼女は「ルミさぁ〜ん」と小野寺さんに声をかけた。沙綾に呼ばれた彼女は野村さんとの談笑を切り上げ、沙綾の方を向いた。

「ちょっと、音楽かけてもらっていいですか？」

小野寺さんは、沙綾に言われるがまま、さっきまで彼女たちが使用していた音楽を再生した。状況が今ひとつ飲み込めていない彼女らは、キョトンとしたまま僕らの方を見ている。

「見てたんなら、できるよね？」

沙綾は僕と哲朗くんに視線をやり、鏡の前へ立つように促した。瑞希も「それはいい」と言わんばかりに、哲朗くんの背中を押し出した。小野寺さん、野村さんも楽しそうな目でこちらを見ている。

「どうします？」

哲朗くんは困り果てた表情で僕を見た。

「どうするったって、やるしかないだろ」

「えぇっ！」

哲朗くんの驚きに一々反応する余裕はない。音楽のリズムを掴んで身体を揺らしながら、沙綾たちの動きを思い出すしかない。哲朗くんがついてこれるかは分からない。他人を気にかける余裕が、そもそもなくなっていく。

肚を括って、記憶を頼りに思い切って身体を動かした――。

初出　令和三年五月三日　NOVEL DAYSにて公開

四月一三日（木）

朝から地元のパン屋に赴いて、少々多めに買い込んだ。お店のロゴがプリントされた紙袋を抱えて帰宅すると、部屋を出る前はベッドの中にいた沙綾は、リビングにマットを敷いて、日の光を浴びながらヨガに勤しんでいる。

珍妙なポーズをとりながら、チラリとこちらに視線をやる。

「沢山買ったのね。食べ切れるの？」

「残りは昼飯にするさ」

彼女は「ふーん」と興味がなさそうにいうと、そこからはこちらを気にすることなく、自分のモーニングルーティーンをマイペースに進めていく。こちらもこちらで、薄着の彼女は気になるものの、艶かしい動きや曲線を横目で眺める程度に留め、朝食の準備を進める。ケトルでお湯を沸かし、いつもはインスタントコーヒーのところを、ドリップコーヒーの封を開け、のんびりとお湯を注いでいく。数回に分けてお湯が落ちるのを待つ間に皿を出し、今食べるパンをチョイスする。

揚げたてのカレーパン、きな粉パンと、ホントはお昼に食べたい要冷蔵っぽいミックスサンドを出して、残りの噛み応えがありそうなパンやらクリームパンはお昼に回そう。コーヒーを最後まで淹れて、食卓に付く。一人で「いただきます」とパンにかじりついていると、ヨガやらストレッチやらを終えた沙綾がタオルを肩にかけ、冷蔵庫から甘くない炭酸水を取り出した。汗を拭きながら、パンを食べる僕を見ている。

「一輝って、きな粉好きよね」

「そうかな？」

「お正月だって、せっせときな粉合わせてたじゃない」

「え、やらないの？」

市販のきな粉に砂糖と塩を混ぜて、自分好みの味にしておくのは、大事な行事だと思うのだけど、どうやら彼女はやらないらしい。「粉に気をつけてね」と言い残し、沙綾は風呂場へ向かった。

たまに抹茶や黒蜜、小豆を求めて出かけることもあったように思うけど、身近

な抹茶フレーバーやら、コンビニで手に入るわらび餅やらにはあまり興味を示さなかったっけ……。

粉を撒き散らさないようにきな粉パンを食べ終え、最後のミックスサンドに手を伸ばす。タマゴサンドとキュウリのサンドイッチに、ハムレタス。普通の白いパンと全粒粉らしい色違いのパンとで、見ていて楽しい。

お店には、フルーツサンドやら、もっと肉々しいハンバーガーっぽいのもあったけど、それは今度の楽しみにしておこう。

パンを食べ終え、「ごちそうさまでした」と手を合わせる。食事終わりのコーヒーは、新しくインスタントコーヒーを入れる。ゆっくりコーヒーを味わいながら時計を見ると、まだまだ午前八時を過ぎたところ。

先週オープンに漕ぎ着けた萱野駅前のサロンへご挨拶に伺って、その後のフォローやら、他の販促物、マーケティングに関する打ち合わせやらをするのが、今日一発目の仕事。現場へ直行してからの出社になるけど、まだ少し早い。

シャワーを終えてバスタオル一枚で出てきた沙綾をチラリと見て、「洗面所、空いてる？」と聞くと、「まだダメ～」と応えた。

「スムージー、お願いしていい？」

彼女は目一杯の可愛らしさをかき集めて、風呂上りの用事をおねだりしてきた。

「いつものでいいんだよね？」と訊くと、彼女は頷いて、「ありがとー。じゃ、よろしく」と脱衣所へ戻って行った。

「オレも暇じゃないんだけどな～」と呟きながら、自分の食事を片付ける。野菜室から小松菜を取り出し、「バナナを入れるんだっけ」とレシピを思い出しながら、自分がやらなければいけない朝の支度に思いを巡らせた。

初出　令和三年五月五日　NOVEL DAYSにて公開

五月一三日（土）

随分久しぶりに見るような気がする哲朗くんの顔付きは、いつの間に精神と時の部屋に入ったのかと思うような変貌を遂げていた。隣のテーブルでやいのやいのと姦しく打ち合わせに興じている瑞希たちに視線を向けながら、手元のビールに手を伸ばした。

「お義兄さんは、まだ実家に帰らないんですか？」

彼は僕の目をジッと見つめてくる。問い詰めるようなトーンというよりは、ゆったりとした、たっぷり息を吸ったような低めの声だった。

「君のお兄さんになったつもりは、まだないんだけど」

彼は「あ、すみません」と口では言うものの、そこに余り意識は向いていないようだ。あくまでも悠然と僕の言葉を待っている。彼に対して悪意はないのだろうけど、ささやかないたずら心が異様に引っかかる。とはいえ、それに過剰な反応を示すのも、それはそれで大人気ないと言うか、カッコ悪いと言うか、己の美学に反する気もする。

できるだけさり気なく、かつ素っ気なく聞こえるように「そのうちね」と答えた。彼は、自分の口の中で「そのうち？」と繰り返すと、少しだけ身を乗り出した。

「来月は、みぃちゃんの誕生日ですよ。それも、二十歳の」

彼は瑞希の方へチラリと視線をやった。指折り数えれば、と言うかちょうど3週間後の土曜日が、彼女の誕生日。土曜日だってことで例年より気合が入っているらしい、とは聞いているけれども、それに出席しないのか、という圧のつもりだろうか。

とうの昔に実家を出た身にとっては、たとえ記念すべき二十歳の誕生日だったとしても、弟妹のその後にはそこまで興味が湧かない。健康でいさえすれば、勝手にやってくれとしか思わないし、彼も自分の妹にはそういう態度じゃないかと思うけど、どこまで行っても彼には「大事なみぃちゃん」だもんな。

どう答えるか考えている間に、隣のテーブルから自分のグラスを持って沙綾がこちらに移動してくる。

「随分ラブラブなのに、みぃちゃん以外の女に手を出してるんだって？」
沙綾はシレッと情報をぶっ込んで、届いたばかりの唐揚げに手をつけた。哲朗くんの顔に漂っていた余裕綽々といった印象が、一気に退いていく。
「それは興味深いな。本当なのか？　哲朗くん」
彼は「あ、いや」とさっきまでの勢いが微塵も感じられないぐらい、縮こまる。僕を「お義兄さん」と呼んだ時と同一人物とは思えない。
「私は別にいいと思うけど。そういうお年頃だし」
沙綾はあくまでも淡々と振る舞っている。初耳の貞操観念を隣で聞かされている同棲相手としては、その堂々たる態度に何とも言えない衝撃を密かに受けている。
「プラトニックなんです〜って下手なヤツより、場数踏んでてそこそこヤレる相手の方がいいじゃない？」
それは分からんでもないが、哲朗くんみたいなタイプにそういう話はパンチが強すぎる気もする。そちらをチラリと見やると、存外なんでもないような表情で沙綾の話に相槌を打っている。
「でも、みぃちゃんを不安にさせるのは良くないな〜」
沙綾の言葉に、哲朗くんは「確かに」と深く頷いた。
「分かってるなら、もっと言葉と態度で示せ〜。私の大事な友達、悲しませたら承知しないからね」
彼女は、指で摘んだ唐揚げの先で、哲朗くんを指した。彼は申し訳なさそうにペコペコ頭を下げている。僕はなんとも言えない不思議な気持ちを肴に、ちょっと温くなったビールを胃に流し込んだ。

初出　令和三年五月一五日　NOVEL DAYSにて公開

五月二八日（日）

哲朗くんは胴回りがやや大きなワイングラスを傾け、ちょっぴり白濁した黄色い液体を身体の中へ流し込む。口に含んだ瞬間、苦そうな表情を浮かべる。僕はそんな彼に見せつけるように、同じグラスに注がれたビールをグッと飲んだ。初夏の暑さに、つい一口で飲み過ぎてしまう。

彼は僕の方をジッと見ながら、手元のワイングラスを持て余していた。

「やっぱり、運動した後のビールは旨いね」

「せっかく運動したのに、ビール飲んだら一緒じゃないですか」

「細かいことを気にするなって。それより、せっかく奢ってるんだ。もっと旨そうに飲んでくれよ。地元醸造の旨いビールなんだし」

哲朗くんは「別に奢ってくれって言ったわけじゃ」などと呟くものの、ビールスタンドでは手元のビールを飲むしかない。サーバーからたっぷり注いでくれたスタッフさんが、こちらに満面の笑顔を向けてくれる。まだ若そうに見える彼らがここで作っているビールだ。それを、いつまでも不味そうに飲むような哲朗くんじゃないはずだ。彼は再び、ビールに口をつけた。今度はさっきほど嫌そうな表情を見せなかった。

「一輝さんって、友達とかいないんですか？」

「なんだよ、藪から棒に」

「僕とか沙綾さんとかと飲み歩いてる印象しかなくて」

「だんだん、そういう遊びだけになっていくのさ」

東京にいた頃だって、知り合いに連れて行ってもらった店で顔なじみを作って、時間があればとにかくそういうところへ行って、終電ギリギリまで飲んだり、時には朝までぶっ通し飲んだり。おごりおごられ、時には男女の出会いもあったり、限界を超えて路上で吐いたり。

ちょっと前の出来事なのに、随分昔のような気がしてしまう。

こっちの友達、同級生と落ち合ったって、やることは多分変わらない。カラオケかボーリングか、山か河原でバーベキューか。こうやって、身近な仲間と一杯ひっかける方が、いくらも健全じゃないか。それに——

「先月から心理学部生なんだったら、こういうところで人間観察とかすべきじゃないか？　あっちの二人はどういう関係か、とか、お店の人はどういう背景でココにきたのか、とか」

哲朗くんは僕が示した人たちに、ゆっくり視線を向けていく。一通り観察すると、店内をグルっと見回していく。

「照明がどうとか、テーブルの素材がどうとか、スタンディングにしてる理由とか、遊びながら勉強にもなる」

「デザイン的にも、ビジネス的にも、確かに生きた教材ですね」

「答えが知りたければ、質問することもできるしな」

哲朗くんはそれなりに納得したらしく、小刻みに頷いて、ビールを飲んだ。

「それはそれとして、お父さん、どうでした？」

「別に。なんともなかったよ」

肩透かしレベルで、何にもなかった。ただお互いに異常にぶっきらぼうなだけ、こっちがありもしない想像を働かせて勝手に嫌悪感を募らせていただけ、のような気もしてくる。割と永年悩んできたつもりだったのに、蓋を開けてみれば、独り相撲に過ぎなかったとは。

「ただ、やっぱり好きにはなれないな」

「それで、いいんじゃないですか。僕も、親父のことは嫌いというか、苦手だし」

哲朗くんの言葉に、自然と口元が綻んだ。「なんすか、急に笑って」と彼には気持ち悪がられたが、そんなことは気にしない。

「もう一杯行こうか。どれにする？」

哲朗くんはグラスに目をやり、「まだ残ってますよ」と言うが、知ったこっちゃない。僕は彼をカウンターまで引きずって、メニューを突きつける。選べないなら、強めのIPAにしてやろう。さぁ、もう一回、乾杯だ！

初出　令和三年五月一九日　NOVEL DAYSにて公開

六月六日（火）

「本当に、送って行かなくていいのか？」
僕が妹に問いかけると、彼女は「うん」と答えた。大きなスーツケースを引きながら、一人で外に出て行った。
「相変わらず、心配症だなぁ」
普段より大人しめのファッションに、地味目のメイクをしている沙綾の姿に一瞬ドキッとしながら、「いつまで経っても、妹だからな」と答えた。
「もう、二十歳も過ぎたんだし、立派な大人でしょ」
「それはそうだけど、そんな簡単に、年齢で切り分けられるか？」
彼女は両手でマグカップを抱え、「う〜ん」と小さく唸りながら上を見上げた。
「難しい、か」
「それに、妹だから」
「弟だったらどうなの？」
アイツがもし、弟だったら？
「弟だったら、ほっぽり出してるな。男なら、自分の身は自分で守れ、って」
「それもそうか」
沙綾はそれ以上突っかかることなく、食卓でさっき作った資料を見直している。打ち合わせを経て書き加えた部分もさっさとデータにしておきたいところだけど、あくまでも彼女らのプロジェクトだから、余計な口出しは控えておこう。
「問題は、脚本ってところだよな」
僕は新しいコーヒーを淹れて、向かいに座る。端っこの方に行ってしまった資料を手元に引き寄せ、目を走らせる。粗も散見されるが、学生がパパッと作ってこのレベルなら、ギリギリ合格点か。
「書くだけなら、森田さんとかにお願いしてもいいんだろうけど」
「それだと、みぃちゃんの撮りたい画になるかは分からないんだもんね」
沙綾は再び天井を仰いだ。そもそも、森田さんに小説が書けることは疑わないが、映像向けの脚本、シナリオなんて書けるんだろうか。フィクション、ストーリーを考案する、肉付けするという意味では似ているけれど、微妙な違いが難し

い気もする。
「そもそも、課題、自主制作のために書いてくれるのかって問題もあるけどね」
「まあね。そこは何とかネゴするしかないけど、みぃちゃん次第かなぁ……」
普段とはまるっきり違う見た目で、真剣に悩む姿、考える姿がとても新鮮だ。表情の一つ一つ、何気ない仕草が気になって仕方がない。
沙綾は僕の視線に気がついたらしく、視線を合わせて、やんわり睨む。
「ちょっと、真剣に考えてるんだけど」
「お、おお。悪い、悪い。可愛い妹と、彼女のためだもんな」
隣の資料をサッと引き寄せて、視線を隠すように目の前にかざす。紙の向こうで沙綾はしばらくムスッとしていたが、それどころじゃなくなったのか、再び真剣な表情で考え始める。
隣に用意しておいた白紙のコピー用紙を取ると、近くに散らばっていたペンを握った。彼女なりに何やら書き出していく。
「みぃちゃんの願望、画を優先するんなら、本人が脚本もやるのが一番よね」
「でも、プロデュースも脚本も演出も監督が全部やるのも、仕事としてどうなのか、ってところはあるよな」
「独り相撲の小さな作品になるのも、勿体ないもんね。折角やるなら、いいものにしたいし……」
沙綾のペンが、ここまでの話を適当にまとめていく。キーワードを丸く囲んで、関係性を何となく書き加えていく。
「今度、森田さんも巻き込んで相談しちゃうか」
「そうね。それがいいんじゃない？　悩んでても仕方ないし、協力してくれるかどうかも、まだ分からないし」
沙綾はパーっと表情を明るくして、「森田さんに相談、打ち合わせ」とデカデカとメモをした。二重三重にグルグルと丸く囲んで、ペンを手放した。
「あー、スッキリした」
彼女は椅子から腰を上げ、少し下がって腰を回す。食卓の上に広がっている資料、彼女が書いたメモも、スッキリとは程遠い散らかり方をしている。
「ねぇ、なんか食べに行かない？」
彼女は僕にグッと近づき、ヘアメイクにはそぐわない雰囲気で言う。そのギャップがまた、僕の変なところをグッと刺激する。
「でも、片付けないと」

「いいじゃん、そんなの。後でやるから」

沙綾はいつも通りの強引さで、僕の手を引いて立ち上がらせる。大人しめの衣装に、その強引さはちょっと反則だ。僕は彼女に圧倒されるがままに、財布と鍵だけ持って部屋を出る。こういう彼女と、どこで何を食べたらいいだろう。少ない選択肢を必死に探して、ベストな答えを早く見つけねば。

初出　令和三年五月二一日　NOVEL DAYSにて公開

七月七日（金）

今日の進捗を日報にまとめ、オンラインで勤怠を打刻した。念のため、チャットツールを見に行っても、目ぼしいやりとり、メンションはなさそうだった。

椅子に座りっぱなしだった腰を上げ、肩と首を解しながらゆっくり伸びをする。気がつけば二〇時前。さっきトイレに立ったのが一八時半ごろだった気がするけど、時間を忘れて集中してしまった。

空になったカップを持って、リビングに向かう。普段ならテレビがついていて、何かしら聞こえてきても良さそうな時間帯だけど、灯りすら点っていない。七夕なのに一日雨で撮休と聞いていた気がするけど、沙綾は出かけたんだっけ？

壁際のスイッチをつけると、食卓に突っ伏している沙綾の背中が見えた。「灯りもつけずに、何をしてるの？」と言いかけたところで、規則的な寝息を立てているのに気がついた。僕は出来るだけ音を立てないようにグラスを洗い、遮光カーテンを締めた。窓の外はまだ雨が降っているらしい。

寝室から毛布でも持ってこようか考えていると、沙綾はゆっくりと頭を起こした。顔に変な線をつけたまま照明が眩しそうに目を薄く開け、「仕事、終わった？」と掠れた声で呟いた。

完全に一日オフの化粧っ気のない顔に、逆にドキッとしてしまう。彼女の手元にあったにはティッシュと輪ゴムで作られたてるてる坊主。握り締めた手の中には、作りかけのそれがぐしゃぐしゃになって収まっていた。

「いま終わったよ。ご飯、食べた？」

沙綾はまだボーッとした様子で首を横に振る。僕は彼女に、よく冷えた麦茶を入れて目の前に置いてやる。彼女はコップを両手で包み込むように持つと、ちびちび飲み始めた。

この雨の中、今から何かを食べにいくには気が引ける。宅配で何か頼んでもいいけど、それもそれで悪い気がする。冷蔵庫を開けても、目ぼしいものはなさそうだ。野菜室も冷凍庫も、パッと食べられそうなものはあまりない。週末に買い出しする習慣が完全に仇となった。

冷蔵庫の前でひとり考え込んでいると、いつの間にか洗面所でスッキリしてき

たらしい沙綾が、冷蔵庫横のストッカーを触り始めた。
「お母さんからもらった素麺、この辺に仕舞わなかったっけ」
そういえばこの間、義母さんからお中元か何かで素麺もらったような。彼女は何度か引き出しを開け閉めすると、「あった、あった」と中から箱を取り出した。
「でも、麺つゆはなかったぞ」
「一輝って変なところで古いのね」
沙綾はこちらを振り返って、笑った。素麺の入った箱をカウンターに置き、改めてシンクで両手を洗う。髪をゴムで止め、エプロンをつけると意気揚々と鼻歌を歌いながら野菜室と調味料の棚をじっくり眺める。
「とりあえず、一輝にはお湯を沸かしてもらおうかな」
沙綾はスムージー用の野菜をいくつか取り出して、葉物やトマトを洗っていく。
「ほらほら、ボーッとしてないで動いた、動いた」
彼女の声に、僕は言われるがまま、両手鍋に水をたっぷり張ってコンロにセットした。沙綾は楽しそうに、包丁片手に野菜を加工していく。一体何が出来上がるのか、何を食べさせられるのか想像を膨らませながら、目の前の鍋がいつ沸騰するのか、気になって仕方がなかった。

初出　令和三年七月一八日　NOVEL DAYSにて公開

七月一九日（水）

「兄貴が帰って来てから半年か。あっという間だな」
目の前で妙に親父くさく枝豆を摘む弟は、話し振りもなんとなく年寄り臭い気がする。ついこの間酒が飲める年齢になった程度だろうに、周りの環境がそうさせるのだろうか。
「あっという間に年末だって言ってるよ、きっと」
晃は渋い表情を浮かべ、「それはヤバいな」と言った。
「こういうところで管巻いて、時々同窓会やって、友達がだんだん結婚していって、自分も何となくで結婚して、子供が生まれて」
「ま、その他大勢のオレはそんな人生だと思うけどね」
「その他大勢で、家業継げるのか？」
晃は話の途中で通りがかった店員を呼び止め、生ビールのお代わりを注文した。顔馴染みの店員か、友達か、仲良さそうにやりとりをすると、僕の方に向き直った。
「その話は、また今度」
「いつ切り出されても、オレは継がないからな」
「分かってる、分かってる。今日はただの飲み会だって」
「友達が捕まらないからって、仕事終わりの兄貴を呼び出さなくてもいいだろう」
晃は顔の前で両手を合わせ、「悪ぃ、悪ぃ」と小さく頭を下げた。
「しっかし、兄貴も大変だな。例の映画」
晃の口振りからすると、今日の瑞希もパワフルだったらしい。体力が有り余っていそうな晃でも、疲れた表情を浮かべていたのはそれが原因か。瑞希も同席すれば良かったのに、まだ作業が残っているからと武藤さんのオフィスまで送って別れたらしい。
「晃の夏も瑞希に捧ぐ、か」
「水曜日か日曜日限定でな」
晃は乾いた笑みを浮かべながら、届いたばかりのビールをグッと呷った。僕も釣られて笑い声が零れる。

「家族旅行なんて歳でもないし、友達と遊びに行こうにも休みが合わないし。1日ぐらい、海かプールは行きたいけど、一人で行ったってしょうがないし」
晃の今の職場的にも、華がある気配はなさそうだ。
「ウチのフットサル部に入れてもらうか？」
デザイン会社のなんちゃってフットサルだけど、多少の出会いはなくはない。人数が足りないとは聞かないが、一人ぐらい外野が参入しても問題はないだろう。
晃は少し考えてから、「再来月以降かな」と言った。
「フットサルはフットサル、夏は夏。暑すぎる時期に走り回るのはちょっとね」
中学までサッカー一筋だった男とは思えないセリフだが、彼の言い分も分からなくはない。
「夏にしかできないことを先にやってから、フットサルかな」
「OK、OK。秋から行けるか、話だけ聞いとく」
僕はスマホを取り出し、念のために自分宛に「晃、フットサル、打診」とメッセージを送った。リマインドの設定は後でいい。ついでにカレンダーを見ると、会社主催の納涼会だの、BBQだののイベントも入っている。若い子が来ると断言はできないけど、意外とあの社長は人脈が広い。この辺りも誘ってみるか。
顔を上げると、晃は「すまん、トイレ」と席を立った。道中でさっきの店員さんにちょっかいをかけながら、店奥のトイレへ姿を消す。あいつはあいつで案外、上手にやってるのかもしれない。
戻ってきてからどんな話をしようか考えながら、メニューを手に取った。

初出　令和三年八月二七日　NOVEL DAYSにて公開

八月一九日（土）

モノレールを降り、連絡通路を渡って、次の電車が来るのを待っている。特別に急いだつもりはないのに、立ち止まった瞬間からドッと汗が吹き出してくる。弱冷車で一駅乗っても大した効果は得られないだろうけど、宇野辺で降りて阪急茨木まで延々と歩くことを考えたら、こっちの方が断然マシだ。

もうそろそろ夕方といってもいい時間帯だろうに、まだまだ陽は高く、気温も湿度も一向に落ちる気配がない。乗り継ぎまでまだ二、三分あるのなら、道中のコンビニで何か買えば良かった。ホームを見渡しても、自動販売機までが遠く感じる。

ポケットからハンドタオルを取り出して一人で汗を拭っていると、ここまで一緒に帰って来た哲朗くんが、黄色い炭酸水を買って戻って来た。間もなく電車が入ってくるアナウンスが流れたが、僕は目の前に差し出されたペットボトルを受け取って、思う存分に水分を身体の中に流し込んだ。一回で半分ぐらいがなくなってしまった。

哲朗くんは哲朗くんで、もう一本買っていたらしく、軽く二口ほど飲んで電車に乗り込んだ。僕は慌てて蓋を閉め、彼の後に続いて乗る。向かいのドア前まで進み、ポケットに手を突っ込んだ。

「買い出しさせたみたいで、ごめんね」

小銭を探ってみても、十円玉は切れている。百円玉を二枚摘んで、哲朗くんに差し出すものの、彼は「いいんです」と受け取らなかった。

「今日一日付き合ってもらいましたし、新田さんにはお昼も出してもらったんで」

そういえば、エキスポシティでのお昼は新田さんが出してたっけ。

「学生が遠慮するなって」

「いやいや、数百円なんで」

哲朗くんは、頑なに受け取ろうとしない。「じゃあ、遠慮なく」と小銭をポケットに戻した。窓の外の青々とした風景を眺めていると、あっという間に隣の駅に着いた。茨木市駅のホームから、改札階へ降りていく。

「じゃあ、この後奢ろうか？」

駅前商店街で、瑞希や沙綾と飲む予定になっている。この後の予定も聞かずに誘ってみると、彼は申し訳なさそうに「行きたいのは山々なんですけど、先約がありまして」と自分の荷物を大事そうに抱えながら言った。

「瑞希も来るのに？」

「残念なんですが……」

彼と横並びで改札を通り抜けた。目の前のエスカレーターで下へ降りる。

「そっか。じゃあ、また今度だ」

「すみません。僕のワガママに付き合ってもらって」

哲朗くんは丁寧に頭を下げて、西側出口へ歩いて行った。僕はそれを見送りながら、東中央商店街の方へ足を向ける。スマホを取り出して時刻を確かめるものの、待ち合わせの時間にはまだ少し早い。いつものビアスタンドで一杯ひっかけるか、駅に戻って喫茶店か本屋に入るか。とりあえず、手元のペットボトルを飲み切ってしまおう。

通路の端に寄って、スマホを眺める。新田さんから、「今日はありがとう」とメッセージが届いていた。どうやら向こうも家に着く頃らしい。「また月曜日から、よろしくお願いします」と返事を出し、社内連絡用のチャットツールを立ち上げた。

次の木曜日に、「新田さんの誕生日」という連絡が入っている。しまった、何も用意していない。新田さんも新田さんで、一言言ってくれればいいのに――。

初出　令和三年一〇月八日　NOVEL DAYSにて公開

九月七日（木）

「へー。これがそのうち並ぶんだ」

僕は沙綾にA3サイズの見本を返した。昨日のうちに、彼女からPDFのデータも受け取ってはいたが、タブレットやスマホで見るより、大きく印刷されたものを見るほうがやっぱり良い。

「哲朗くんは、見た？」

斜向かいに座っている哲朗くんは、首を振った。沙綾は彼にもデータを転送しているようだったが、彼のそぶりを見るにそれすら目を通していないようだ。沙綾は彼に「見る？」と半分に畳んだ見本を差し出すが、彼は「すみません。ありがとうございます」と断った。

「製本されてから見ます」

彼の隣に座っていた瑞希の肩が微かに動いた。それからは表情を変えることなく、普段通りの動きでグラスを傾けている。

「コレで、父さんも母さんも鼻高々だ」

フリーペーパーの見開き一ページのみとは言え、ポスティングされることもある地域の有力誌。同世代のクリエイターとして、上坂さんと二人だけのインタビュー記事がどんと掲載されているのは兄弟の自分もなんとなく誇らしい。

ちゃんとスタイリストもついたインタビューだったようで、普段通りのヘアメイクとあまり変わらないように見えて、実物よりはるかに美人に撮ってもらっている。

「写真のレタッチも、かなりしてもらったんだろ？」

見本がぐちゃぐちゃにならないよう、慎重にカバンへしまっていた沙綾が顔を上げ、「ぜ～んぜん」と応えた。

「全体の色味補正とか、一本だけ跳ねちゃった髪の毛とかは修正してもらったけど、あとは無加工だよ」

「盛るとか加工とか、そういうのとは無縁の雑誌らしいんで」

横から哲朗くんも沙綾の言葉を補強する。多少の演出、魅せ方の工夫はあっても正直が信条なんだっけ。そういうスタンスだから、地域密着の素朴なタウン誌

だけど信頼が厚いのか。普段のルミさんからは想像もつかないけど、あれで案外、真っ当な編集者だったとは。

「ただ、お義父さんには内緒でお願いします」

哲朗くんが小声で言う。

「お義母さんと晃さんには伝えてあるんですけど、お義父さんには秘密で通したいそうで」

彼の隣で、瑞希はちょっぴり縮こまって下を向く。秘密も何も、父と会う予定はしばらくないし、会ったとして話すこともないとは思うけど、わざわざ哲朗くんの口から言わせるぐらいの想いがあるのか。

「瑞希がそうしたいんだな？」

一応、本人の意思も確認しておきたい。目の前の頭頂部へ声をかけると、彼女はそのまま頷いた。

「顔を見せろって」

僕は椅子から身を乗り出して、瑞希の顔に両手を添える。彼女が持っているビールが零れないように気をつけながら、グイッと顔を上げた。ようやく本人の眼が見えた。一瞬驚いた様子だったが、すぐにまっすぐな目で僕を見つめ返してくる。眼が泳ぐ様子は微塵もない。

「よし、分かった」

僕は瑞希の顔を離して、自分の席に座り直した。瑞希は瑞希で、手元のビールを零さないよう、元に戻る。

「でも、コレのスタンド、そこら辺に結構あるよな？」

幸い、実家の地域ではポスティングされていなかったように思うけど、求人募集のフリーペーパーに混ざって置いてあったりする。万が一家に届いても母さんか晃が上手に隠すんだろうけど、本人が出先で不意に手に取る可能性もゼロではない。

瑞希は「その時はその時で」と言ったが、緊張感に満ちた日々が始まるぞと、心の中で他人事のように心配しておいた。

初出　令和三年一〇月一三日　NOVEL DAYSにて公開

九月二五日（月）

沙綾は、一人分も残っていなさそうなカレーに水を注いだ。片手鍋の持ち手を両手で握り、適当なところで蛇口を締めた。慎重にコンロへ鍋を置き、電源を入れる。彼女はお玉を鍋に入れ、温まるのを待ちながらゆっくりかき混ぜていく。

「えーっと、それから……」

彼女は引き出しを探り、何を足すか考えている。顆粒の昆布出汁と、顆粒のカツオ出汁を見比べながら、唸り声を上げた。

「どっちかっていうと、カツオの方が合うんじゃないか？」

「そう？　まぁ、一輝の好みに任せるけど」

沙綾は昆布出汁を袋に戻し、カツオ出しの小袋を開けた。勢いよく全部入れようとするから、途中で「半分ぐらいでいいんじゃないか？」と声をかける。

「全部は多いって」

「ちょっとぐらい濃い方が美味しい気もするけど、まあいいや」

半分より少し多めに入ったところで彼女は手を止めた。袋の口を何度か折り曲げ、塩や砂糖の隣に置いた。出汁が溶けるように混ぜながら「美味しくなかったら、一輝のせいね」と笑って言った。

「分かってる、分かってる。で、次は」

沙綾は僕が言い終わるより早く、冷蔵庫からカットネギを取り出した。うどん二玉と共に、僕が帰り道のコンビニで買って来た追加の食材。白ネギか青ネギを大きめに切って入れるのも美味いと思うけど、ネギを切る手間を考えたら、カットネギで十分だ。

「ネギを入れるんでしょ？　言われなくても分かってるって」

彼女はカットネギの蓋を開け、徐々に煮立って来た鍋の中を見ながら、「本当に、全部入れるの？」と疑いの目で僕を見つめる。

「全部は多くない？」

「大丈夫、大丈夫。それに、残したって使わないだろ」

彼女は、裏返しにした蓋を元に戻し、蓋についた注意書きを読んだ。賞味期限は明日になっている。ここで使い切らないと、賞味期限までに消費する可能性は

非常に低い。沙綾は「それもそうね」とネギがたっぷり入ったパックを鍋の上でひっくり返した。

パックに張り付いたネギも、しっかり手で拾っていく。綺麗に空になったパックはゴミ箱に捨てられた。

「で、うどんだ」

沙綾は冷蔵庫からうどんを二袋取り出した。裏面を見て、「あ、しまった」と声を上げた。

「うどんは別で茹でた方が良かった？」

沙綾は僕に疑問を投げかける。そのままカレーの出汁に放り込んで茹でれば完成なんだけど、二人分に分けることを考えたら別に茹でた方が良かったか。

「OK、分かった。とりあえずお湯を沸かそう」

沙綾は片手鍋の火力を最低に落とし、別の鍋に水をたっぷり張って、隣のコンロにそれをセットした。少々強めの火力で沸騰させにいく。うどん用のお湯が沸くまで、沙綾はカレーの鍋が焦げ付かないよう、ゆっくりお玉でかき混ぜ続けている。

「で、金曜日は半休なんだっけ？」

彼女はうどんが入った袋の裏面を読みながら、もう一方の手を動かし続けている。

「社長がパーティに出席するから、急ぎの仕事がない連中は休みでいいんだって」

「なんだかんだで、哲朗くんのご両親てスゴいのね」

沙綾は隣の鍋を気にかけながら、間が持たないのか、うどんの袋を二つとも開け始める。流石にお湯の中には入れないらしく、一旦そこまでで手を止めた。

「急に言われてもスケジュールは動かせないから、一人で楽しんで」

彼女は、ボコボコと沸騰し始めた鍋の火力を少し下げ、カレーの方は一旦スイッチを切った。お湯の中へうどんを放り込み、引き出しから菜箸を取り出してかき混ぜ始める。

袋の表示によると、茹で時間は九〇秒。スマホのタイマーを起動して、僕は湯切り用のザルを探しにキッチンへ足を踏み入れた。

初出　令和三年一〇月一五日　NOVEL DAYSにて公開

一〇月一一日（水）

作業着姿でない弟を見るのは随分久しぶりだった。私服の中でも比較的かっちりしていそうなボタンダウンシャツとチノパン、カジュアルなジャケットというのも、非常に違和感を覚える。

晃が来ているものといえば、サッカーのユニフォームか、中学や高校の制服、そうでなければ母がイオンや平和堂で買ってくる謎の服といったイメージしかない。流石に、実家の仕事を手伝うようになってからは自分で色々買いに行くようだ。

その中でも、今日は比較的ちゃんとしている部類の服装をしている。ユニクロで買い揃えたのは間違いなさそうだが、そこら辺の大学生に見えなくもない。

「なんだよ」

晃は僕の方を見て、嫌そうに言った。

「いや、絵に描いたような『馬子にも衣装』だなと思ってね」

「どうせオレは、都会的でオシャレな兄貴と違って、ダサいの土方だよ」

「そんなことは言ってないだろ」

「目がそう言ってるんだって」

晃は僕がさっき入れたコーヒーに口をつけた。

「ウチじゃ、コーヒーメーカーも床暖房もないぜ？」

「そうだっけ？」

一度足を踏み入れたっきり、しばらく顔を出していない実家のリビングを脳裏に思い描く。あの時もしばらくぶりだったから、何がどう変わっていたか、一つずつ確かめる余裕もなかった。

真新しい電気ポットぐらいはあったような気がするけど、食器棚や冷蔵庫、エアコンがどんな形で、どんな色をしていたかも覚えていない。

「わざわざスリッパも履かないし」

彼は自分が履いている来客用のスリッパに目をやった。向こうに行った時、来客用のスリッパは出てきた気がする。僕は晃に「スリッパは、お客さんだけだよ」と答えた。

晃は自分の腕時計を見た。そろそろ昼過ぎ、僕の昼休みもボチボチ終わる。
「出発は何時だっけ？」
「予定では、午後一時。連絡もらってから、下で集合、のはず」
じゃあ、ほぼ予定通りか。沙綾だけならいざ知らず、今日は朋子さんも同行するらしいから、とんでもない遅刻はしないだろう。晃は一瞬スマホを確かめ、すぐにスリープへ戻した。
「で、結局、兄貴はあの人と結婚すんの？」
晃はぶっきらぼうに言い放った。答えを求めている様子ではなかったが、僕は答えを濁しながら、曖昧に肯定した。すると、彼は「マジかぁ」と項垂れた。
「あの人はともかく、あのオバちゃんが親戚か」
「別に、そんな親戚付き合いもしないって」
「たま〜にだから、余計にさ。兄貴はいいけど、緊張しっぱなしというか、馴れる気がしないっていうか」
あ〜、それはそうかもしれない。彼より頻繁にやりとりしていそうな瑞希も、朋子さんの前ではまだまだ緊張しまくっている。もっとも、それは僕にしたって大して変わらない。
「でも、別に怖い人じゃないよ。気持ちがピリッとするだけで」
「それが怖いんだろ〜」
でも、その「怖い人」と今日は半日一緒にいることになる。間に沙綾がいて、ただの運転手に近いポジションだったとしても、ピリついたままの半日は中々の試練だろうな。
晃への言葉を考えている間に、彼のスマホが鳴った。どうやら、いよいよその試練が始まるらしい。慌てて出ていく弟に心の中でエールを送りつつ、僕は僕で、午後からのリモート業務を開始した。

初出　令和三年一〇月二四日　NOVEL DAYSにて公開

一一月六日（月）

このところ残業続きだったから、早めに仕事を切り上げて帰ってきたのに、リビングでカバンを置いたところで、大事なことを忘れていたと気がついた。カレンダーの木曜日のところに付いている印、繰り返し見ていたはずなのに忙殺のあまり、記憶から消していた。

Googleカレンダーにも妙なところにスケジュールが入っていると思っていたけど、朋子さんの誕生日じゃないか。社長があまり強調しないから、完全にスルーしている。

「木曜日、お義母さんの誕生日だよな」

キッチンで夕食の準備をしてくれている沙綾に、気まずいなりに声をかけた。彼女は明るく「そうだよ」といいながら、暖かい豚汁をカウンターに置く。

「あ〜、でも、無理しなくていいよ。お母さんからもそう聞いてるし」

沙綾は笑顔で言うと、僕に背中を向けて炊飯器の蓋を開けた。二人分のご飯をよそってくれている。僕は彼女が用意してくれた食事を、順番に食卓へ並べていく。沙綾は自分のご飯茶碗を持って食卓につくも、グラスを出していることに気がついて冷蔵庫の前へ戻って行った。

ビールを持って再び椅子に腰掛けると、二つのグラスに均等に中身を注いでくれた。沙綾は空っぽになった缶を脇に除け、僕にグラスを持たせて勝手に乾杯すると、勢いよくビールを飲んだのちに両手を合わせ、「いただきます」と食事を開始した。僕も勢いに負けてビールを飲むも、一口飲んだ後で「いただきます」と挨拶をしたものの、箸を取って食べ始める気にはならなかった。

沙綾は自分で作った豚汁を一口食べ、「うん、美味しい」と自分に感想を述べる。豚汁にもメインの焼き鮭にも箸を付けない僕を見て、彼女は「どうかした？」と言った。

「お義母さんの誕生日だって言うのをすっかり忘れてて、仕事がさ」

「佳境なんでしょ？　知ってるよ」

タイミングが非常に悪く、今週末が期日だった。その前日に早期に切り上げてお誕生日会というのは、今からでは何ともしようがない。

「本っ当に、ゴメン」
「だから、気にしなくて大丈夫だって。大丈夫じゃなかったら、ボスがそんなスケジュール組まないでしょ？」
沙綾は僕のことなど微塵も気にせず、自分の食事をどんどん進める。彼女の言うことも一理ある。とはいえ、あの社長は社長で、自分だけはきっちり出席したりするんだろう。
「だから、冷める前に食べて欲しいな」
「あ、ああ。ゴメン」
沙綾は「謝らなくていいから」と笑って言った。僕はようやく箸を取り、豚汁から口をつけた。生姜がたっぷり効いていて、非常に美味い。
「お義母さんの誕生日会は、夏にやったよね。お義父さんの誕生日は？」
沙綾が記憶を辿るように上を見ながら、僕に訊ねた。
「親父の誕生日は年末。三〇日」
「ふーん。で、おいくつになるの？」
沙綾の質問に、「え、あれ？」と言葉が詰まる。親父って今、いくつだっけ。
「寅年っていうのは聞いたような気がするんだけど」
沙綾は箸をおいて、スマホを取り出すと「寅年」で検索する。
「流石に六〇歳以上には見えないから、一九七四年生まれの四八歳で、来月四九歳？」
沙綾の答えで恐らく合っている。僕は頷きながら、「ああ、そうじゃない？」と答えた。
「じゃあ、お祝いしなきゃ」
「いやいや、いいって」
実家で一緒に生活してた時から、親父の誕生日を祝った覚えがない。年末の忙しさも相まって、適当に扱われていたのかもしれない。僕が「いい」と言ったのに、沙綾は「私がやりたいの」と話を聞いてくれない。
彼女が一人で乗り気でも、親父の誕生日会なんて実現するはずがない。ただ、ほぼマブダチの瑞希や最近妙に仲が良くなってきた晃を取り込めば、可能性はいくらでもあるのか。彼女がやるなら、そこに俺も出席せざるを得まい。
食べ始めたときとは違う億劫さに、箸の進みが遅くなる。「冷める前に早く食べちゃって」という沙綾の声を聞きながら、半ば機械的に手と口を動かした。

初出　令和三年一〇月二九日　NOVEL DAYSにて公開

一一月二四日（金）

事務所に届いていた印刷物を、直帰ついでに義母の仕事場へ持ってくるだけのつもりだったが、何故か小包の梱包を手伝っていた。大事に持ってきたクリスマスカードと、年明け早々のホームパーティの案内チラシは、九割近くがその小包の中に納められていた。

僕は最後の一つの封を閉め、机の一角に置いた。郵便ポストに投函できるサイズよりは一回り、二回りほど大きく見えるが、両手で抱えて持つようなサイズではない。ただ、三つずつほど重ねて置くと、それなりのボリュームに見える。

「結構な数ですね」

朋子さんが入れてくれたお茶に口をつけながら僕が言うと、彼女は何も言わず、曖昧に微笑んだ。

伝票は今から一つずつ貼ると聞いたときは、気が遠くなりそうだった。それを物ともせず、丁寧に一つずつやり切る気持ちがあるから、長年愛されるサロンのオーナーをやれるのだろう。

僕がボーッと小包の小さな山を見つめている間、朋子さんは僕が持ってきたチラシをジッと見ていた。印刷前の決定稿でOKはもらっていたものの、改めて「女帝」にじっくり検品されると背筋が伸びる。

沈黙に耐えかねて、僕も残っていたチラシを一枚手に取った。四年ぶりのホームパーティ、作っている時からずっと目に入っていたはずなのに、やっと日付が目に留まる。

「あっ、この日」

「ああ、気にしないで。分かってるから」

朋子さんは笑いながら、手にしていたチラシをテーブルに置いた。自分のカップに、ポットから紅茶を注ぐ。

「オタクのボスにも言われたんだけどね。決めちゃったものは、しょうがないじゃない」

笑いながら軽い口調で言うものの、どこか突き放すような印象もあった。その凛というか、ツンとした言い方に、沙綾との繋がりみたいなものも感じる。そう

いうところに振り回されながらも、最後まで付き合ってしまう社長に、同情や親近感を抱かざるを得ない。

「この間から、何回もすみません」

彼女の誕生日も、納期の直前でスケジュールを合わせられなかった。来月のクリスマス会も、先約があって都合がつかなかった。今度こそはと思っていたのに、結局年始のイベントも「仕事優先」になることが確定した。

朋子さんは「ああ、いいのいいの。何にも気にしないで」と言った。

「私のことなんか気にしないで、あなたたちはあなたたちで良いようにして頂戴」

僕がこっちへ戻ってくる時も、同じ調子、同じ口調でそう言われて、元々の住まいを僕と沙綾のために明け渡してくれた。その出来事からも、ほぼ丸一年。バタバタだった去年の年末からもうすぐ一年か。

「それで、どう？　慣れた？」

朋子さんが、ちょっぴり意地悪そうな表情を浮かべて訊いてきた。

「おかげさまで、何とか」

「そう。それは良かった」

朋子さんはまだ何か言いたそうな様子で、口元に笑いを浮かべながらお茶を飲む。追求のためのトゲがない言葉、失礼のない表現を必死に考えていると仕事用のスマホがポケットの中で震える。通知は、事務所からの電話だった。

朋子さんに「すみません」と断ると、彼女はどうぞ、とジェスチャーで出るように促してくれた。お言葉に甘えて電話に出る。電話口の向こうは、「まだ仕事が残ってる」と叫ぶ社長だった。

「分かりました。今すぐ戻ります」

急ぎの仕事は一通り終わらせたつもりだったけど、チェックが甘かったらしい。出来ればこのまま直帰したかったけど、定時にはまだ余裕がある。オフィスへ戻って、素直に残務と向き合おう。

僕は、同情の目を向けてくれている朋子さんに、オフィスへ戻る旨を伝えた。そんな目をしないで欲しいと思いながら、淹れてもらった残りのお茶を飲み切った。

初出　令和三年一一月七日　NOVEL DAYSにて公開

一二月二二日（金）

立派な一本木のカウンターで、哲朗くんと横並びに座ってビールを飲んでいる。久しぶりにココへ来てみると、彼は以前の反応が嘘のようにどんどんビールを飲み、次の銘柄をどうするか、店員さんと話し合っていた。

僕は目の前にいる調理担当らしいスタッフの動きを観察していた。一朝一夕に真似できるものは一つもないとして、無駄のない動きや段取りの確かさは、見ていてとても気持ちがいい。

プロフェッショナルな仕事に自分ももっと頑張らなきゃなと感化されていると、話し終えた哲朗くんが次の銘柄を決めてオーダーした。苦味が強く、アルコール度数も高いタイプらしい。

「珍しいね」

以前はもっと甘味が強そうなフルーティなタイプとか、色味がちょっと変わっているタイプを頼んでいたような気がする。哲朗くんは男らしい表情で、「そろそろ、そういうのに挑戦しようと思って」と言った。

「焦って無理しないほうがいいぞ」

「別に、無理してないですよ」

彼は店員さんが運んできたグラスを受け取り、早速一口飲んだ。苦味が強いのか、さっきまでの強がりが嘘のように、一瞬顔をしかめた。

「ほら、言わんこっちゃない」

「想像より、苦かっただけですよ」

彼は頑なに強がって、もう一口飲んだ。やっぱり苦そうに見える。僕も次は、同じ奴にして、味を確かめてみようか。

哲朗くんがオーダーした銘柄を、手元のメニューで確かめていると、彼はお口直しにポテトサラダに箸をつけた。一口食べて、ビールを飲む。今度は平然を装っていた。

「君は、明日行くんだよな？」

僕が急に話題を振ると、彼は一瞬「明日？」と呟き、「ああ、朋子さん主催のクリスマス会ですよね？」と言った。

「一輝さんは欠席でしたっけ」
「納品と、取引先の忘年会があるからさ」
年内ギリギリの仕事をなんとか片付けて、明日の納品に間に合ったのは良かったけど、そういう日に限って朋子さんのイベントが入っている。
「うちのボスは出席するのにな」
「お誕生日もお祝いに行ってたんですよね？　凄いなぁ、安藤さん」
「本当にな」
似たような仕事をしているはずなのに、自分より仕事の多い立場でありながら、朋子さんのことは絶対に外さない、不思議な人。今度、仕事のコツを聞いてみよう。でないと、義理の息子候補の立場も危ぶまれる。
「で、細やかなお願いなんだけど、沙綾の写真、お願いできないかな？」
明日のクリスマス会で、みんなとダンスを披露すると言っていた。サンタのコスプレで瑞希と共に踊る沙綾をこの目で見れないのが残念で仕方がない。僕の内なる熱情が届いていないのか、哲朗くんは頭に疑問符を浮かべたような表情でこちらを見ている。
「記録係もするんで、写真も動画もバッチリ撮って来ますけど」
「それはそれとして、君の個人的な記録としてさ」
コレまでもダンスの記録や、各種イベントの公式記録を担ってきたのは分かっている。広報、プレスっぽい記録でない半分プライベートな物を期待しているのだけれども、彼は今一つピンと来ていないようだ。
「瑞希のサンタコスとか、記録係の仕事だけで良いのか？」
僕がそう言うと、彼は微妙に表情を変えた。
「そういう写真を、沙綾の分も撮って欲しいだけだよ。アングルとかシチュエーションとか、全部任せるからさ」
哲朗くんは神妙な面持ちで頷いた。これで、今夜の取引は成立だ。あくまでも、健全なイベントの健全な一瞬を切り取ってもらうだけ。コレで、明日の仕事も頑張れる――。

初出　令和三年一一月一六日　NOVEL DAYSにて公開

一二月三一日（日）　午前八時

レンズが大きいサングラスを掛けていた沙綾は、さっきまで付けていたカバのマスクを脇に置いて、アイスコーヒーを飲んだ。僕はそれを見ながら、ホットコーヒーを啜る。

「次が、二五分発だっけ？」

沙綾の問いに、僕はスマホで探し当てた時刻表を見ながら頷いた。

「七番のりばだって」

「三〇分ぐらいか。結構長いな〜」

「目の前で行ったところだから、仕方ないさ」

哲朗くんの家を出てから、阪急の駅前じゃなくて、JRを目指して歩いてきたのがよくなかったらしく、タイミング悪く目の前でバスを逃してしまった。あと五分早く出ていれば間に合ったのに、その五分が起きれなかった。

沙綾はまだ眠そうな顔をしながらも、スッとした姿勢でコーヒーを飲んでいる。

「乗る前にトイレには行きたいけど、どこだっけ？」

「確か、あっちのビルの中じゃなかったっけ」

僕は指で、そこまでの道を差した。このまま、二階のデッキを渡って行った途中、右手のビルに入ったら男女それぞれのトイレがあったはず。東出口の方にもいくつかあった気がするけど、どうせバス乗り場は西側なんだし、距離的にも大して変わらないんだから、西側に行けばいい。

「そうすると、もうちょっと早く出なきゃダメ、か」

「一〇分ぐらいは見ておいた方がいいかもな」

「りょ〜かい」

沙綾はそう言いながら、再びコーヒーに刺さったストローへ口をつけた。僕もスマホで時間を確かめながら、思ったほど時間がないと思いながら、コーヒーを飲む。

「バスで一回帰るでしょ。それから〜」

「シャワーを浴びて、仮眠を取ろう」

「寝なくてもいけるって」

「いやいや、二時間ぐらいは寝た方がいいって」
沙綾は不満そうな声を上げる。哲朗くんの家で少し横になりはしたが、睡眠が足りているとは思えない。二日酔いというほどの症状もないものの、バスに乗ってから降りるまでの間に寝たとしても、半日ぐらいは満足に動けないだろう。
「午前中しっかり寝て、それから動いた方がいいって」
沙綾はなおも、「えー」と抗議する。バスがある間に帰ろうって何度も言ったのに、始発で帰るとダダを捏ねたのは誰だったっけ？　ついつい意地悪を言いそうになり、言葉を押さえ込んだ。
どう説得するか考えているうちに、スマホが震えた。さっき設定したアラームが作動したらしい。カップに残っているコーヒーを慌てて飲む。沙綾はマイペースにストローでくるくるとコーヒーを混ぜている。
「もう動かないと」
「え、そんな時間？」
沙綾は僕に「慌てすぎだよ～」と笑って言った。確かに余裕は多めに見ているけど、次のバスを逃せば一時間以上待たなきゃ行けない。僕は沙綾のコーヒーに口をつけて、一気に飲み干した。お腹に冷たいものが入ってくるのを感じながら、グラスとカップを返却口へ運んだ。　僕がバタバタしている間に、沙綾はマスクをつけてカバンを持った。僕が「行くぞ」という前に彼女の方から先に店を出た。
トイレによって、七番のりばへ戻ってくるまで、ほとんど余裕はない。少し足早に沙綾の手を引いて、デッキの上を歩いた。沙綾が無理なくついて来られる速度で、例のビルへ向かう。
ちゃんとついて来られているか、不意に振り返って確かめると、沙綾は楽しそうに笑っていた。変な女に引っかかってしまったもんだなと思いながら、その変なところをこの上なく可愛いと思ってしまっている自分も、とことん変なんだろうな……。

（完）

初出　令和三年一一月一九日　NOVEL DAYSにて公開